

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1026
施設名	西国立保育園
施設所在地	立川市羽衣町2-43-4
法人名	社会福祉法人草蒨学舎

1. 活動のテーマ

<テーマ>

まちなかの保育園で自然を感じよう ―栽培・四季・食育―

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

四季における植物の栽培観察・収穫を体験し、あわせて水生生物の飼育体験を通して、日々の気候、豊かな四季の移り変わり、自然の営みを感じ「なぜ・ふしぎ」の心を育むとともに、発達段階に応じた食育や表現などの活動へと展開し、社会環境への興味関心へとつなげていく。

2. 活動スケジュール

【栽培活動】ブドウの栽培(4~9月)花壇の土作り(5月)イチゴの収穫(5月)サツマイモ栽培(6~11月 苗植え/草取り/つる返し/つる切り)バケツイネの栽培(6~10月)プランターを利用した花・夏野菜の栽培(5~8月)梅シロップ・梅干つくり(6~7月)冬野菜の栽培(11~2月) 観察活動 収穫物を昼食の食材に提供 【栽培を通じた活動】肥料づくり(5月)感謝祭礼拝(11月) 収穫の恵みを神に感謝し祝う キャンプごっこ(11月)庭にテントを張り、火を起こして収穫物を用いた調理活動を行い、秋の気候と味覚を皆で味わう。 【表現】上記活動を絵画等で制作する。【秋の実りとクリスマス】「火」を知る(11・12月; キャンプで火のもつ力や危険などを理解する、キャンドルや劇あそびを通じ人々の営みにおける火の歴史や役割を知る)もちつき(12・1月; 収穫したイネモミを脱穀し、もちつきでは新年飾りの鏡餅をつくり、伝統行事を伝える) 【水生生物の飼育】メダカ・ドジョウ・ヌマエビの飼育(えさやり・水替え)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

子ども達にとって新たな体験への興味関心や意欲を大いに高めることが出来るよう、物的・人的環境の設定に留意した。【栽培】圃場・プランター・土・肥料・農具・苗・シャベル・耕耘機・画材等【収穫感謝祭・キャンプごっこ】テント・かまど・薪・羽釜・サツマイモ他収穫物等【クリスマス】劇衣装・舞台装置【もちつき】臼・杵・正月飾り【節分】節分豆(次年度栽培の肥料に活用) 【水生生物の飼育】水草・水槽・餌・ポンプ

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

四季を通じた花や作物の栽培活動、水生生物の飼育ではクラスや発達段階に応じた環境設定を行い、幼児クラスは「見たい・触れたい」など五感を刺激し、一人ひとりが自発的に関わり取り組む意欲、季節や生命への「なぜ・ふしぎ」といった探究心を引き出す点に配慮しながら、適宜働きかけを行った。乳児は安全に配慮しながら保育者と共に労作を行い、子どもの視線や発語を通じた興味関心に保育者が都度応え、興味関心を引き出すよう心がけた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

花壇の土作りやさつまいものつる切りでは年長児を中心に「『良い土』になるように」と皆で懸命に混ぜたり、力をあわせてつるを片付けるなど、自発的に手伝う姿が見られた。数多くの新たな体験を楽しみながら栽培や労作の尊さ、季節やさまざまな物事がつながりを知らせる貴重な機会となった。



。月ください。)

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

自分たちで植えた植物の世話を通して、身近な自然への興味や関心が日々高まる姿を認めた。作物の「生長」と共に子どもたちの「成長」を実感することができた(幼児クラス) / 種まきと発芽では子ども達も目を輝かせて観察していた。小さな子ども達ならではの、水生生物や虫、鳥の不思議な動きにも気づき全身をもって表現する、豊かな感性が見られた(乳児クラス)

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1026
施設名	西国立保育園
施設所在地	立川市羽衣町2-43-4
法人名	社会福祉法人草萌学舎

1. 活動のテーマ

<テーマ>

カガクをあそぶーみず・くうき・いろ・ひかり・かたち・てざわりー

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)
子どもたちが日常の中で自然に触れている「水」「空気」「光」「色」「形」「てざわり」といった科学的な要素に着目し、それらを「遊び」や「体験」として楽しむ活動を行った。今年度は「水」「空気」を主素材として取り上げ、水や空気もつ性質や状態、他の素材を組み合わせた際に生まれる変化や動きなどを、遊びを通して体験できるようにした。子どもたち一人ひとりが小さな「なぜ?」「ふしぎ!」に出会い、興味や探究心を育てていくことをねらいとした。

2. 活動スケジュール

【みず】色と水(色水づくり)：6~7月 水と氷のふしぎ(アイスクリームづくり)：7~8月 水の流れ(水車をつくってあそぶ)：7月 冬の寒さを利用した氷づくり：2月 てざわり(小麦粉・片栗粉あそび)：7~8月 (寒天あそび)：8月 【くうき】「かがくあそび」
【くうき】4月：おやこdeカガク 在園児・卒園生・保護者 6月：かがくあそび 幼児クラス 11月：ガラクタ音楽会 2月「かがくあそび」年長児

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)
子ども達の興味関心や意欲を高めるよう、物的・人的環境の設定に留意した。
使用した主な素材・道具は、砂、絵の具、食紅、ペットボトル、消臭ビーズ、アイスクリームマシン、小麦粉、片栗粉、寒天、バケツ、たらい、風船、水槽、水鉄砲、サインペン、ガラス、空き缶、木切れ、など。大学生との活動においては、提供する内容や子どもたちの姿について事前に丁寧な打ち合わせを重ね、子どもたちが楽しみながら興味関心を持続できるよう、発達段階や活動の流れを踏まえたプログラム設定を心がけた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

乳児クラスでは、保育者の介助のもと、五感を通した直接体験を大切にしながら活動を行った。幼児クラスでは、年少から年長まで、それぞれの発達段階に応じて自主的・自発的に関わりを広げられるよう環境設定を工夫した。水を用いた活動は主に夏季に実施し、科学的な発見だけでなく、暑さの中で水に触れる心地よさや涼しさも感じられるよう意識した。年長児向けのかぐあそびでは、小学校以降の学びへの興味関心につながるよう、家庭でも保護者やきょうだいと話題を共有できる内容を取り入れた。乳児クラスでは、保育者が子どもの視線や発語、しぐさを丁寧に受け止めながら関わり、その都度興味関心に応えることで、「やってみたい」という気持ちを引き出せるよう努めた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

子どもたちにとって、活動の中で出会うさまざまな現象や素材は、新たな発見であり体験であった。初めて見る変化や感触に驚き、大きな声を上げたり、目を輝かせたりしながら、「もっと見たい、やりたい」と意欲的に活動へ参加する姿が見られた。また、子ども同士で見せ合ったり、保育者に気づきを伝えたりする姿も多く見られ、保育者にとっても、子どもの反応を踏まえながら次の活動をより豊かに工夫していく意識につながった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

サラサラだった粉が水を含むことで形や手ざわりを変えていく様子に、子どもたちは大きな驚きと興味を示していた。実際に見て、触れて、試す中で、夢中になって遊ぶ姿から、五感を使った直接体験の大切さを改めて感じた。また乳児期の子どもたちにとっては「触れる」「握る」「崩す」といった感触体験そのものが大きな学びにつながっていることを実感した。保育者が安心できる環境の中で寄り添うことで、子どもたちは自分から素材に関わり、興味を広げていく姿を見せていた。